

槐

かい

岡井省二創刊

平成18年2月号

平成十八年二月一日発行 第十六巻第二号 通巻第一七六号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



初明り

高橋将夫

冬木立祈りの姿なりしかな
煩惱を封じて滝の凍てにけり
よろこびの八手の花の揺れなりし
うきうきと大綿虫のよぎりたる

蕪汁すすり後生を大事にす
都合よき風は風除け通るなり
手羽先をつまみ大寒むこさむかな
大切にしまひ忘れて冬ぬくし
星雲や枯野をめぐる夢覚めて
鮫鱈の貌に光明さしてきし
猩々の能の衣に初明り

遊心

西村純太

身ほとりのほとけのこゑや木の実落つ
ると鳴る糸電話ありぬ芋の露
柿火花罪あるごとく宙に溶け
らつきようの花びら我と消えゆきし
任侠の果ては花野に身を置くや
ひらひらとゆくへ定めぬ秋蝶は
甲斐無くば彼の世を思ふ秋の午後
羅漢また哭いて笑うて誰がこころ
毘盧遮那佛あまねく光我が身にも
てのひらの秋の螢や名隠しそ

特別作品

夢の世も木の実降る降るこのきらら
九品佛紅葉の錦衣手に
虎落笛神に逢ひたる無音の間
づんだ餅食はば我身は腑ぬけの腑
のざらしの霜夜にきしむ重力の場
にぎみたま枯野わたるは狐火か
円柱を廻りさやけし国生めり
物狂ほし秋思にまさる遊心かな
みるからに干涸びてゆく鴟の贅
露けしや羽衣宙に舞ふばかり

槐安集

市場基巳

秋祭夏にかも似て燃ゆる日よ
白雲のかがやきに鴟声張れり
波近き秋日に乾せる鶺鴒の翼
鳴く虫にいつ加はりし波の音
弁天も蛇神も愛しぬかごの実

水野恒彦

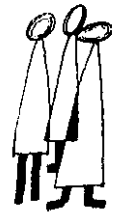
枯鷄頭いちづの色をのこしけり
冬の蠅真白き壺の置かれあり
金剛の砂ゆれてゐる冬泉に
神官の一語一語や水涸れて
冬の野を馬湯氣立てて通りけり

石脇みはる

丈のままたほれて咲きし紫苑かな
熊野権現紅天狗茸のあり
立冬や三条大橋鳥瞰図
蓮根の煮メと瓢箪徳利と
臘八や白いベンチに石叩

竹内悦子

恵心院その奥にある大根畑
本尊は大日如来檀の実
金色の鯉千両も万両も
一斉にとび立つ鳥や草紅葉
枯蓮の枯れ切つて日を集めけり



延 広 禎 一

栗 栖 恵 通 子

墨するや天鼓てんこきこゆる省二ノ忌
雁や地靈ぢりやうざはつく穴太積
水の秋おぼる豆腐とフリユートと
夜来香いえらしやん衣笠茸のスープ食す
桃吹くや白紙せきにならぶ0の数

「人」の字に枕干さるる神の留守
立冬の柩の点火ボタンかな
小春日や窯の中なる花酵母
きざんでもきざんでもからつぼの葱
万力まんりきに螺子らしありにける十二月

中 島 陽 華

加 藤 み き

天網消えをりまつ朱な烏瓜
山もみじ兵六餅を食うべけり
虎落こらく笛大口袴はかま畳みけり
茶の花や観音様の足のうら
五芒星の形目出度しでけれ枯芙蓉

赤い山青い山山鷹渡る
じわじわと朝日の枯葉動きをる
きりぎしの罅ひまに鳴る風鯨来る
油揚と丸大根煮夜空晴
シリウスやはるか熊野の波の音

大島翠木

檸檬より眩しき枕ありにけり
福耳の見つむや鳩の輪を残し
借老やまた綿虫を見失ふ
冬桜この世をひとりづつ身罷り
冬満月胸に銀杏の降りゆきぬ

雨村敏子

千頭の水牛の背ナ鳥渡る
中洲より人のこゑする神迎
獅子柚子の臍に触つてをりにける
橋姫や手に二つぶの蓮の実
頭皮ももいる竜田姫の酩酊す

黒田咲子

霜枯の土橋や犬の身ぶるひす
焼鳥のけむり軒這ふ一番星
冬うららだるま絵を描く蟻であり
おぼつかかな筋目きれぎれ貝割菜
馬追は猊下の御顔日向ぼこ

小形さとる

亀石は亀石で秋たけなわで
弟切草^{オトギリス}婆がわんわん泣いておる
からす瓜別れとうない人と居る
野稗・犬蓼死ぬ死ぬとまだ言うか
腿^{もも}踵^{かかと}雁落つ夜となりにけり

槐市集

犬塚芳子

冬紅葉山の日波をたたみこむ
風に乗り日に乗り落葉索々と
ぼんやりと朝日膨らむ冬の霧
海苔粗朶に寒々とした空なりき
枯蘆や權の音のみ聞えたり

岩下芳子

黄落や瑞垣の内堆し
冬晴や土寄せをする柵の内
広報車より風邪声の流れけり
まざまざと半月のあり石露の花
蓮根掘る技を二代目三代目

岩月優美子

梟の声の波動に寝まり入る
梵唄や鴨一列に石の上
ふつふつと星生る鶏頭末枯^がれたり
鷹の天大漁旗の干されあり
噴煙は生^{なま}の地球よ神の留守

植木戴子

神渡種壺買ひに行きにける
佛頭と出合つてをりし枇杷の花
紅葉散る六角堂の石のへそ
山の晴鬱金の花を覗きをる
櫛や日のある椅子に冬帽子



槐集

高橋将夫選

石庭の心音耳に小六月 枚方

中野 京子

千年の一灯拝す紅葉晴 枚方

谷村 幸子

櫟の実のころがつてくる神の前
水踏んで桜紅葉を拾ひける
石路咲いて迦陵頻伽の声ありき
賑賑と十一月の二河白道

岡崎

岩月優美子

冬晴の鶴の羽ばたく櫟かな 京都

竹中 一花

ゴスペルの響き解け合ふ冬の波
冬ざれの広目天の眉間かな
梟の首のぐるりと日本海
三島忌の島々赤く昏れにけり
ミネルヴァの梟つばさ広げぬる
身の内に狐火ひとつ飛び込みぬ
ユトリロの空や木の葉の落ち尽くす
羚羊や夢に瑞々しき山野
手違ひでハンマー鮫に生まれきし

近藤 喜子

龍心池の反橋白し神迎 枚方

近藤きくえ

大楠の影にわが影冬ぬくし
神山に日の入り雁の渡りをり
川面照り銀杏落葉の渦を巻く
ブラックバス釣り放ちたる皮衣

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

(前略)

石庭の心音耳に小六月 中野 京子
自らの心臓の鼓動さえも聞えてきそうな静寂の中に居る。心音という生の表現が静寂をリアルにとらえている。小六月の季語が心音という生の表現を詩的に昇華している。理性と詩情の融合といえよう。

ゴスペルの響き解け合ふ冬の波 岩月優美子
冬の波音とゴスペル・ソング(福音歌)のハーモニー。なるほど、冬の波音に黒人霊歌、ジャズ、ブルースなどの混じりあったゴスペルの旋律と歌声が聞こえてくるようだ。

ミネルヴァの梟つばさ広げぬ 近藤 喜子
ミネルヴァは古代ローマの女神。技芸をつかさどる。聖鳥はフクロウ。ミネルヴァのつれてくるフクロウは知恵の象徴。そのフクロウが翼を広げているという。知恵があまねく行きわたる。まるで、今の槐を象徴しているようだ。

木の实降る天降石や法の山 谷村 幸子
法の山は具体的には宇治上神社一帯とのことであるが、それとはともかく、法の山なのである。そこに天降石がある。法の山だから石も降れば木の実も降る。法の山の厳かさに対して木の実

降るがなんともやさしくて、癒される。

山眠る雄獅子雌獅子の納め蔵 竹中 一花
獅子を納めた蔵と静かな冬の山の雰囲気がよく出ている。祭りが何かに使う獅子なのだろうが、役目をはたし、次の出番まで山と一緒に静かに眠っている図。雄獅子と雌獅子とそろってめでたい。

龍心池の反橋白し神迎 近藤きくえ
龍心池の反橋の石の白さが鮮やか。龍心池から白い反橋の屈折を経て、神迎へ至る実景がそのまま精神の風景となっている。

ふくろうの眼で見たるあかき星 天野きく江
星というからには、周囲は闇に包まれている。闇に輝く赤い星。梟の目、そして先師岡井省二の目にはどう映っているのだろうか。私は無限の空間とエネルギーをそこに見る。

たましひに帛紗のありぬ今朝の冬 西村 純太
この朝はこのほか寒く、魂も氷らなばかりだったのだろう。絹の帛紗のやわらかさとぬくもりにそれが感じられる。帛紗にやさしく包まれる魂と全てを包み込む魂：そんなことを思う冬の朝だったのだろう。

鉢叩龍の眼のこちら向く 植木 戴子
こちらを向いている龍の眼をみた。きつと睨みつけるような眼差しだったことだろう。しかし、平定盛が瓢箪を叩いて念仏を修したという鉢叩の由来を思い浮かべると、口元がほころぶ。